

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(30)

戦後のジャーナリズム復活と『岩波写真文庫』

松本 徳彦（副会長）

焦土と化した東京にいち早く復活したのが、国民の真実を知る権利を代弁してくれた雑誌ジャーナリズムであった。

敗戦から2カ月足らずの1945(昭和20)年10月、粗悪なザラ紙に刷られた『新生』という総合雑誌が登場する。活字に飢えていた市民は露店の店頭に積み上げられた雑誌を、列をなして買い求め、3日間で13万部も売り切り、増刷を重ねて37万部も売ったという。

同月には戦時中休刊していた『婦人画報』『文芸』『文学』が復刊。11月には『文藝春秋』『新潮』と続き、翌46年『中央公論』『改造』が復刊、『世界』『展望』『潮流』『平凡』などが創刊した。その他『人民評論』『言論』『自由』などの民主雑誌や『真相』『政界ジープ』などの暴露雑誌も登場して賑わったが、粗悪なザラ紙か仙花紙に水性インクで刷られたもので、ほどなく市場から消えていった。

カメラ雑誌の復活は46年1月に、1921(大正10)年創刊のアルス『カメラ』が復刊した。グラビア4頁、本文24頁という見映えのしない本であったが完売したという。

47年1月『光画月刊』の復刊。48年7月『毎日グラフ』、49年5月『フォトアート』(研光社)、10月『アサヒカメラ』の復刊。50年3月『日本カメラ』、10月『岩波写真文庫』、51年9月『写真サロン』復刊。52年6月『写真工業』(光画社)、54年5月『サンケイカメラ』、6月『カメラ毎日』、60年7月『コマーシャルフォト』(玄光社)、63年7月『太陽』(平凡社)と続いた。

49年4月に毎日新聞の傍系社から「もっとも真実を伝えるものは写真である。自由を守るためには何ものをも恐れずレンズをむける」というスローガンを掲げて登場したのが、タブロイド判の日刊紙『サン写真新聞』であるが、60年に廃刊となる。

同年4月には、木村伊兵衛、菊池俊吉ら撮影の写真集『東京 1945年・秋』(文化社)が発行される。焼け跡から立ち上がる諸相をスナップした日本人の活力をルポルタージュした内容で、英文の解説を付け駐留軍のお土産用に売り出された。

47年11月には週刊のグラフ誌『週刊サンニユース』が創刊される。創刊号の表紙は木村伊兵衛撮影の女性3人の横顔だった。編集責任者は戦前35年に日本工房を立ち上げ、海外向けの豪華グラフ誌『NIPPON』を編集した名取洋之助で、自らも『ライフ』で活動し、夢見た『ライフ』の逞しい報道ぶりに刺激されて『週刊サンニユース』の創刊を引き受ける。顧問としての木村伊兵衛のほかに、新進気鋭の写真家三木淳、稲村隆正、長野重一、田沼武能、藺部澄、佐伯義勝、牧田仁、石井彰、三堀家義、樋口進らと漫画家岡部冬彦、根本進がいた。

せっかくのユニークな編集だった『週刊サンニユース』も経済的な行き詰まりから2年余で廃刊となった。

翌50年岩波映画社に移った名取が手掛けたのが『岩波写真文庫』である。B6判の小型の写真ブックで、写真をふんだんに使って、充実した内容を分かりやすく解説し、値段が100円と安価であるところから59年休刊までの8年間に286冊の文庫を世に出した。

## ■ 写真原板のデータベース化が進む

写真保存センターにはこの『岩波写真文庫』全286冊のすべての写真原板約4万本(内訳35ミリフィルム16,500本、ブローニーサイズ22,000本、4×5インチ2,200枚、ガラス乾板161枚)が岩波書店から寄託されていて、今その整理が軌道に乗ったところである。

これらの原板には特定の写真家を除き、多くの原板撮影者は岩波映画(法人著作)と貸与を受けた外国公館、行政機関、企業、研究所、団体、報道機関など種々な



広島 一戦争と都市一



菊池俊吉



一年生 一ある小学教師の記録一



熊谷元一

ものが含まれている。

その全貌の一端を紹介する。

『岩波写真文庫』の題材は非常に多事にわたって編集されているので、これを恣意的に分類し、主な題材を抽出してみた。

【自然科学】木綿(1)、古い形式の綿織物から最も近代的な紡績業の姿までをとらえ、人間と社会の関係を読み解く。南氷洋の捕鯨(3) クジラの生態と捕鯨船に乗り込み、捕鯨に携わる人々の実態を描く。レンズ(9) レンズの原理と発達、応用の面を平易に語った副読本。雪の結晶(7) 自然が作り出す雪の結晶の顕微鏡写真美。赤ちゃん誕生日まで(63) 赤ちゃん誕生からの成長記録。

【社会・産業】アメリカ(6) 名取の写真を通してみた風景、先住民、人種、繁栄した都会を紹介。広島一戦争と都市(72) 原爆被害から、戦争、原爆、人間のことを考える書。かいこの村(84) 化学繊維の発達で落ち込む、養蚕農家の実態を描く。農村の婦人—南信濃の一(121) 農業の抱える諸問題を—農村を例に考える。一年生—ある小学教師の記録—(143) 熊谷元一の新入学した児童の学校教育の現場を捉えた会心作。汽車(21) 日本の動脈国鉄の現場を捉える。鉄と生活(218) 鉄鋼業の発展と日常生活の現場での鉄製品。銅山(24) 銅山の歴史は古い。銅器から仏像、産業用品まで幅広い利用。その銅山の実態を。塩の話(193) 人間の生存に欠かせない塩。その製法と利用を詳しく説く。近代建築(233) 鉄、コンクリートで造られる近代建築の機能性と環境問題を説く。

【美術・歴史・伝記】では、ルーヴル美術館(206) 世界最大の美術館の収蔵品と人類文化に与えた功績を語る。源氏物語絵巻(120) 我が国の四大絵巻の一つ。各場面についての解説が役立つ。キリスト—その生涯と弟子たち—(282) 西洋美術の半分以上を占めるキリスト教美術を解説。ゴッホ—傳記的に—(107) 代表作 190 点を年代順に配し、伝記風に読み解く。麦積山(220) 中国で石窟調査に同行して名取が撮った全貌。日本の庭園(146) 各様式を代表する庭園の樹木や石の配置、飛び石灯、灯籠など日本の美意識について説く。奈良の大佛(32) 大仏をあらゆる角度からとらえた貴重な写真。正倉院—1—(40) 正倉院の歴史と貴重な宝物の保存と研

究の成果を記録。桂離宮と修学院(50) ブルー・ノタウトが称賛した日本の代表的な建築物。

【地誌・新風土記】では、地図の知識(114) 地図の読み方、記号の一つ一つについて詳報。スイス(25) 永世中立国スイスの政治、経済、文化を解説。タイ—學術調査の旅—(275) 仏教国バンコック、チェンマイなどの都会と農村、少数民族を調査した記録。京都—歴史的に見た—(27) 空襲を免れた古都の建築、遺産の数々を紹介。屋久島・種子島(278) 九州の南端から 60 キロの洋上に浮かぶ縄文杉で知られる屋久島。鉄砲伝来の島と呼ばれる種子島の島民の生活を伝える。汽車の窓から—東海道—(113) 車窓に広がる風景を捉え、東海道五十三次図鑑を展開。

【趣味・スポーツ・芸能・その他】では、写真(8) 写真は真実を伝えるものと言われているが、見方、読み方を知らない、その知識を木村伊兵衛が説く。スキー(26) スキーの理論を写真で説明する。野球の科学—バッティング—(35) バッティングの理論を科学的に分解写真でとらえる。文楽(53) 浄瑠璃と人形、それを操る人形遣いの一条乱れぬ動作を捉え、文楽の魅力を伝える。歌舞伎(59) 伝統と役者の芸の魅力を、木村伊兵衛の写真で解き明かす。日本—1956 年 8 月 15 日—(209) 日本人にとって歴史的な日であるこの日の日本の現状を、公募写真でまとめたもの。

などといった題目を、田村栄、長野重一、小柳次一、藤本四八、名取洋之助、織田浩、高橋喜平、塚本閑治、岡本東洋、入江泰吉、木村伊兵衛、三木淳、樋口進、菊池俊吉、林重雄、松重美人、藺部澄、近藤福雄、熊谷元一、石川光陽、細江光洋、八木下弘、梅樺忠夫、飯山達郎、中村昭夫、坂本万七、川島浩、朝倉隆、阿部展也など多くの写真家が撮影したもので、敗戦の混乱した社会から復興を目指した日本人の諸相を写真という記録メディアを通してまとめた記録集は、世界的に見ても稀有な出版である。その膨大な写真群の原板を整理し、分類し利活用に結び付けたい。これらは歴史の変遷、時代を回顧するうえで貴重な資料といえる。



歌舞伎 木村伊兵衛



麦積山 名取洋之助

